

献 辞

本学名誉教授田辺拓先生は、かねてからご病氣療養中のところ平成14年4月25日永眠されました。広島修道大学経済科学会では、教授のこれまでの本学への貢献に対して心から感謝の気持を表し、今号を退官記念号として刊行することにしておりましたが、誠に残念なことにご退職直後に訃報を受取ることになりました。

田辺教授は、昭和29年3月、広島大学理学部数学科を卒業、昭和31年3月同大学院理学研究科修士課程を修了された。昭和31年4月から学校法人鈴峯学園に赴任後、同41年4月広島商科大学専任講師、同42年4月助教授、同48年4月より広島修道大学商学部教授に就任された。平成9年4月からご定年までは新設の経済科学部教授として、コンピュータ入門や基礎情報科学などを担当された。その間、昭和45年～49年には当時の計算室長として本学の情報教育の発展と情報環境の整備に寄与された。昭和48年から私立大学振興政策委員会情報処理教育委員、同長期計画小委員会委員に就任された。一方、現在の(社)私立大学情報教育協会の前身である私立大学等情報処理教育連絡協議会において、昭和52年～59年の間、企画委員、教育ソフトウェア研究委員、情報処理教育シンポジウム運営委員などを歴任された。また、平成2年4月からはHITACアカデミックシステム研究会幹事として活躍され、また平成7年4月からは同副会長に就任された。

学会活動としては、情報処理学会、電子情報通信学会、IEEE Computer Society, およびACM (Association for Computing Machinery) の会員として活躍され、平成6年6月には、情報処理学会中国支部から永年功績賞を授与されている。

教授の研究分野は、一貫してコンピュータ言語とその応用である。教授が研究の端緒に就かれた昭和40年代の前半は、いまのパソコンよりはるかに性能の低い大型汎用計算機が大学でも利用できるようになった頃であって、理科系の研究者は日夜FORTRANでプログラムを作成しパンチカードによるバッチ処理に先を争った時代である。今日のような便利なグラフィック端末など皆無の時代であったため、ラインプリンタによるグラフ出力などについての苦心の論文が見られる。

教授は、まず、FORTRAN について、目的プログラムの最適化と問題点、言語仕様、文字型データ処理、制御構造および拡張仕様と最適化などについて系統的に研究された。その後、アセンブリ言語における Syntax Checker やリンケージ・ローダの開発も行なわれた。コンピュータによる乱数発生は経済・経営問題をはじめ各種シミュレーションのために不可欠の技術である。昭和50年代後半から教授は、最大周期列擬似乱数の研究に着手され、従来の合同法乱数などと比較しその計算時間および統計的性質の両面から詳細に検討された。平成に入ってから教授の研究対象は、オブジェクト志向システム構築のため従来手法を統合して提案された UML (Unified Modeling Language) である。エレベータ運行システムへ適用され問題点を明らかにされた。また、有定愛展教授や富岡恒雄助教授との共著で「経済科学シリーズ」の中にも 2 冊の著書がある。

教授のユニークな点は地道な基礎研究のみに留まらないで、それを教育に十分生かされたところである。特にお若い頃、商学部管理科学科時代の教育姿勢は大変厳しく、薫陶の成果によりゼミの卒業生は社会に出てから高い評価を受けている一方、なかなか単位がもらえず大いに苦しんだ一部学生諸君も居るようである。沼田移転後から開始されたスクールバスの運行には大変関心を持たれ、乗車マナーの指導には非常に熱心であった。また広島修道大学の生え抜きであり、大学の出来事を細かく記憶されていたことから、「修道の生き字引」とも呼ばれた。広島修道大学の一時代を画した名物教授のお一人と言えるだろう。

ご定年までもう一年足らずという時期、昨年 4 月下旬頃から体調の不調を訴えられ、入院療養中であつたが、ついに回復されることなく黄泉の国に旅立たれた。お元気であればまだまだ教育研究活動を続けられたであろうことを慮ると残念で堪らない。心よりご冥福をお祈りしたい。

合掌

2002年11月

経済科学部長

廣 光 清次郎